

故郷喪失者たちの現状  
——飯舘村の復興経過——  
The Status Quo of Those Who Have Lost Their Home:  
Restoration Progress of Iitate Village

大久保 貴弘  
OKUBO Takahiro

Seven years have past since the Tokyo Electric Power Company's Fukushima Daiichi Nuclear Power Station accident which was triggered by the Great East Japan Earthquake and Tsunami in March 2011. However, it can hardly be said that effective measures have been taken for the return of those of Iitate Village who were forced to evacuate due to the high levels of radiation. Though the removal of contaminated soil has been completed and the prior measures of assistance for the returnees have been taken, only ten percent of the villagers have returned to Iitate Village so far. Younger generations especially tend to hesitate to return. Such contradictions are caused by the fact that the assistance for the returnees forces them to live their lives in the radioactive-contaminated areas and also that the returnees can get paid compensation for living their lives under such conditions. This is the status quo of Iitate Village. Through this writing I will compare the interview data of the Iitate villagers, who were interviewed after they were forced to evacuate due to the accident and those of the villagers interviewed recently, with mixed feelings on returning home, and make clear the feelings of those who have lost their homes and livelihood in Iitate Village.

キーワード：離散 (separated people)、帰還 (return home)、グラデーション (gradation)、  
ネイティブ (native)、移民 (immigrant)

## 1. 希望を阻害するもの

2011年3月に発生した、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原発爆発事故（以下、原発事故）から8年が経過しようとしている。この間、放射線の影響により避難を強いられている飯舘村民への帰還政策は、有効な手だてが講じられているとは言い難く、行政の村民に対する支援は、帰還を前提とした災害復興基金による援助（「おかえりなさい補助金」）や放射線対策のみという現状にある。

そもそも飯舘村のように、行政機能を残したままの離散という事例は他には見られない。普通、政治的機能が解体され離散していくが、飯舘村の場合は生活空間と行政機能を残したままの離散で、政治的な抑圧とは異なる形で離散民を生みだしている特殊なケースである。

政策としての原状回復を前提とした除染は、既に“完了”している。そこで、通常の地方自治組織を再開してみたものの、帰還した村民は618人<sup>(1)</sup>で、殊に若者は放射線による健康被害

を恐れ帰還を躊躇している。すなわち、こうした行政がおこなっている帰還政策自体が、村民を被曝下で生活させる有責性を含んでいるといえる。帰還した高齢層<sup>②</sup>にとっても、病院の再開などの目途が立っておらず、社会的な共同生活を維持するには非常に困難な状況に置かれている。

そして現在の飯館村は、帰還者優先策を強固に促進する行政の仕組みとしての権力構造のみが残存<sup>③</sup>し、故郷を想望する村民の愛郷心が“補助金”に変成されてしまい、村民は誇りを取り戻せない状況に陥っているといえる（大久保 2015）。

本稿では、原発事故後避難を余儀なくされた後（2014年）と現在（2018年）の飯館村民のインタビューデータを対比し、離散した飯館村民の類型から、“飯館村における故郷喪失者とは誰か”を明らかにしていく。

## 2. ネイティブとは誰か——移民の歴史

### (1) 飯館村におけるネイティブとは誰か

原発事故後の飯館村は、支援する側・される側、あるいは、加害・被害の二分論によって語られてきた。現在では、離散民の置かれている状況は、当初のように一義的被害者という枠での類別が困難となっている。そこで、多層的・多重的な視点での考察が飯館村離散民の解釈につながるのではないかと考えた。ネイティブの概念を用い、表象する側とされる側の接続を整理することで現在の飯館村の状況が理解できると考えた。

### (2) 移民の歴史——天明の大飢饉

福島県北東部の阿武隈山系中山間部に位置する飯館村は、これまで農業を主として生計を立ててきたが、それゆえ、村民は頻繁に襲い掛かる冷害に対し幾度となく不安定な生活を強いられ、屈辱を味わい、辛酸をなめてきた生活の記憶がある<sup>④</sup>。日本ではかつて、災害により民を失った共同体を維持するため常に移民政策がおこなわれてきたが、その脈絡の中に飯館村もあるといえる。苦難の歴史としては、古いもので江戸時代に全国的に大きな被害をもたらした天明の飢饉（1787年）が挙げられる。飯館村（当時は相馬藩山中郷）そのものの記述は少ないが、飯館村史によると、至る所足の踏み場の無いほどに死体に溢れかえり、逃散した者は1,000人を超えた（飯館村史 1979: 247）という。こうした事態に対し、相馬藩は農村を復興させるために移民政策に力を注いだ。相馬藩への入植は、石川県や新潟県を中心とする北陸地方の浄土真宗の門徒が中心となっていたようである（佐藤昌明 2018: 82）。度重なる災害に対し、技術的に無力であった当時の人びとは無情観を抱く一方で、社会を再建させる「世直し」の機会と捉え、希望と力を結集させ苦難を乗り越えようとする風潮があった（渡辺 2013: 29）。

飯館村は、古くから入植者たちの苦難の歴史とともに歩んできたが、ネイティブの概念を操作的に扱った研究を行っている人類学者の桑山敬己（2008: 31）は、生粋のネイティブではなくても、完全に現地社会に順応している場合ネイティブと同視できると、入植者を包摂したネイティブの定義づけをおこなっている。

### (3) 戦後の移民

戦後行われた入植は政府主導の下、緊急開拓時事業が積極的に奨励された。殊に海外からの

引揚者や復員軍人に加え、軍需工場の操業中止に伴う失職者が噴出した状況下で推進された。

開拓者は、国策のため政府により定められた土地に入植したが、冷害の強襲地帯で凶作はかなり頻繁に起きたため、耕作に適している土地とは言い難く、また開拓者自身が都会育ちで農業に参加してこなかった者もいたため、村内に定住するまでには多くの時間を要し、障害も大きかった。そのため、暮らしの見通しが立たず開墾した土地を手放し離散する者もあり、極端な悪条件の土地では最終的に入植者が定着しなかったところもあった。その上、定住した入植者は農業を続けるにしろ後継の問題を抱えることになった（飯舘村史 1979: 549-560）。

高度経済成長期を迎えると、都市部における経済水準の向上と、農村部の停滞で地域格差が拡大し、開拓農民の離村は拍車がかかっていった。

こうして、近代以降産業化していく社会において移動が自由に行われるようになり、人びとが都市部に進出し始めたことにより、故郷観は本格的に考えられるようになっていった。

#### (4) 飯舘村の誕生

飯舘村の誕生は 1956 年のことで、村自体の歴史は新しい。新生飯舘村は、当時の飯曾村と大舘村が合併し成立したが、誕生した 9 月 30 日は「町村合併促進法」<sup>⑤</sup>の有効期限最終日であったため、土壇場の見切り発車での合併となった。そのため、新生飯舘村の役場の位置など合意に達していない課題も少なくなかった（飯舘村史 1979: 419-428）。たしかに、発足当初の飯舘村は生活を安定させるための冷害対策や所得向上策など肝要な任務が累積しており、そうした課題に先んじて合併に伴う施設の統廃合など、新たな課題が上積みされる形での船出となったのかもしれない。しかし、これまで移民と融合する歴史を歩んできた人びとにとって、主張の異なる人の中での柔軟な議論は、軋轢を解消し、談論を中核とする新生飯舘村行政における議会運営の基盤を構築していったのである（佐藤彰彦 2012: 46-62）。

### 3. 常に揺れ続ける離散民の時間と物語

#### (1) 飯舘村の現状

2017 年 3 月、飯舘村行政は政府の避難指示解除の方針を受け入れ、長泥地区を除く村内の避難指示を解除させた。それに合わせ施設拡充のため公民館を新設し、さらに続けて、放射線の影響により児童・生徒数の大幅減少を見越した上で、約 70 億円を費やし 15 歳までの一貫した総合教育施設を完成させ、2018 年 4 月に飯舘村内の学校を再開させた。

しかし、こうした帰還政策が進められる一方で、帰還した村民によるコミュニティ形成への展望が示されず、文化活動等の財産の損失を伴う地域崩壊の危機にも瀕している。さらに、帰還政策により村民が分断される危機にある。これが現在の飯舘村の現状である。

#### (2) 同時に内在する交錯した胸中

原発事故後 7 年を経て、村民は村での生活と転出後の感覚が少しずつ変化してきている。

佐藤健太氏（30 代・前田地区）は原発事故以前より飯舘村の総合振興計画<sup>⑥</sup>にも携わり、行政と村民の若者が一体となった村づくりに積極的に参加していた。原発事故後は福島市を拠点に劇団を主宰し、表現活動を行った後、結婚、ご子息の誕生、父親の死、会社の代表への就任とこの 7 年間で目まぐるしく自らの置かれた状況は変化した。現在は飯舘村村議会議員を務め、

さらに父の死後、飯舘村内の会社を引き継ぎ代表も務めているが、妻子への放射線の影響を考慮し福島市飯野に居を構え、飯舘村へ通う毎日を送っている。

佐藤健太氏は2014年当時、村への想いを以下のように語っていた。

飯舘を捨てるっていう意味の移住じゃない移住だったら、僕はすごくいいなって感じがするんですよ。自分の生まれた土地として残していきながら、こっち（福島市）に住むっていう。生活のベースをちょっと移すっていう感覚の移住だったらいいのかなって思うんですけど、もしかしたら、全部切ってしまった方が楽なのかもしれないですけどね。うちはたまたま会社があるんで、そこがどうしても残るんで、やっぱり切りきれないっていう。相当大きな決断をしないと、長男なんで、親を捨てるぐらいの気持ちでないとそこからは切り離すことが出来ないと思うんで。他に移った方が、次の展開に行けると思うんで、そっちの方が多分楽なんだろうなって感じがしますけど。自分はどうしても離れきれないんで、そこの葛藤はずっと持ってますね。やっぱり親は親だし、いつ何があるかわかんないんで。ていうと、俺のことそんな心配すんなって父親は言うし。いろいろその辺の行き違いもありながら。戻れないと言っても、うちの親父は既に飯舘村へ戻ってるんで、そういう人たちがいずれ歳とってきた時ですよ。やっぱり高齢化した時に、じゃどうやって面倒を見るとか、目を向けるか。そうなった時に、カメラなんて設置したくないですし。そういう身体的なところが、一番僕は心配かなって感じがしますね。（父親の体調が）悪くなっても（飯舘村まで車で）1時間くらいかかるんで、救急車もそんなに早く行かないですし。何かあった時に、すぐ駆けつけられないっていう心苦しきがあるんで心配だし（2014年5月4日、聞き取り調査）。

当時、佐藤健太氏は村を捨てるのではなく故郷を残したまま、生活のベースを少し移した感覚と共に、精神的に村に縛られる気持ちを吐露していた。同時に、生活圏としての村のコミュニティの回復にも不安を抱いていた。

生活環境が一変した4年後の2018年、佐藤健太氏は汚染された村と揺れ続ける想いを、次のように語っている。

飯舘の出身の人が、必ず飯舘に戻ってこなきゃいけないってこともないんだろうなと思っていて。飯舘も元々、移民を受け入れた文化もあるので。僕たちの祖先もこの辺の地区の何軒か移民の祖先でそういう人たちがいたっていう話は聞くので。飢饉のときに人を受け入れたりとか、そういう政策を打っていたんですよ。なんとかなんとか、ここに人をつないできたっていう歴史があるので、既存の人たちが必ず戻ってこなきゃいけないっていうコミュニティじゃなくて、新しい人たちが入ってくるっていうのもいいだろうし、その中で、やっぱり自分のふるさとの思いがあって、いずれは戻って来たいって人も中にはいるし（2018年8月13日、聞き取り調査）。

佐藤健太氏は、村の価値が失われてしまったことを惜しみつつも、村史に移民政策が組み込まれてきた歴史を引照し、必ずしも自身の帰還にこだわる必要はないという考えを吐露した。そして、彼自身、原発事故後に結婚、子どもを授かったことで心境も変化し、家族との暮らし

の中で人生の時間軸を模索しつつ、時の経過とともに離散民の揺れる思いを新たに語ってくれた。

佐藤健太氏の言談からは、これまで自身が抱いていた「長男が家を継ぎ、役割を果たす」という古い価値観を打破したいという思いが生じている一方、帰還した故郷の時間を想見するアンビバレントな胸懷を読み取ることができる。

一応、飯館、この会社があるので、この会社をちゃんと経営していくってところが、一番の大きな責務かなと思ってはいるんですけど。そのへんの管理という部分に関しては、まだ協力してもらえる人がいるのでいいんですけど。うちの嫁と子どもが、まだここには戻ってこないと思うので（中略）。

将来こうしたい、ああしたいという部分に関しては、ちょっと読めないですね。汚染がどうなるのかっていう部分で、評価がまだ全然はっきりしないじゃないですか。果たしてこれで、本当にいいんだろうかっていう部分も考えつつなんで。ある意味ジレンマでもあるんですよ。長男じゃなかったら、たぶん飯館にいなかったら、もしかしたら国外にいたかもしれない。そう考えると長男という立ち位置と、実家、会社という部分があるからなんとか引き留められてるというか、この村につなぎ止まってるのかな。責任というところなんでしょうね。たぶん僕は次男とかだったら、飯館にいなかったかもしれない。そこまで思いがここに残らないかもしれない。長男で、元々おやじと家を作って、ここに住んでいて、ここを継ぐものだと思って育ててきたから、そのへんでの感覚だと思うので。長男はわりとみんなそういう感覚は持っているとは思いますがね。うちら世代ぐらい、もうちょっと上とか。今の若い世代、20代とか当時で言えば12歳ぐらいの小学生ぐらいの子たちが飯館にアイデンティティーがあるかといったら、そんなにたぶんないと思うし。何を好きで、飯館が好きって言うんだろうかって、逆に不思議に思うくらい。俺が若い頃は、何にもねえ村だと思って育ててきたので。山菜採りとかそういうのを毎年積み重ねてきたから、なんとなくここでの生活のリズムができていて、地域の人たちの顔がどんどんつながってきて、住みやすくなってくるけど。…（中略）…。

いずれはやっぱり飯館の家も面倒見なきゃいけなくなるよなっていうのがあって、早めに自分の家は息子に譲って、俺はこっちに帰ってくるかなとか。そのとき、やっぱり仕事欲しいな。仕事を何とか村の中で作ってみたいな話をされるんですけど。ただ帰ってくるっていうだけじゃなくて。働く場があるっていう魅力があって。故郷での生活とそのマッチングですよ（2018年8月13日、聞き取り調査）。

佐藤健太氏の言談にもある長男としての行動と思考的制約は、日本の表象研究に詳しい日系3世 Kondo, Dorinne の言説に収斂される。Kondoによると、「イエは単純に血縁関係に基づく親族集団ではなく、社会的、経済的紐帯に基づく集合体であるゆえ、イエや家系、家業や家族経営は、道徳的、社会的、感情的にも極めて重要である」という。さらに嫡子にかかる精神的重責についても、「自身の持つ個人的欲望をイエのために抑制することは、道徳的美観であり、イエの義務を無視し自身の計画を追求することは、利己的な未成熟さに思える」（Kondo 1990: 131）とイエ制度のが廃止された今なお潜在的に存在する、土地に縛られる日本の伝統的価値観であると評している。

さらに、佐藤健太氏は村民としてのアイデンティティは画一的に内在化するのではなく、自然と親和的に過ごした村での時間と、そこで結ばれる互酬的な生活ネットワークにより形成されるという。換言すれば、帰還できなくても常に触れることのできる仮想の故郷と紐帯を維持するネットワークが構築できれば、アイデンティの再生産は可能といえる。しかしながら、故郷はアイデンティティの部分的な要素であることに疑いはないものの、そのすべてではない(成田 2000)。アイデンティティの再生産は、帰還を決定づける第一義的な素因とは言い切れず、佐藤健太氏は「責任」の部分が大きいと考えている。ここでもイエの思考に規制された日本の古い価値観が表れている。

### (3) 分断への憂慮

酒井政秋氏(40代・小宮地区)は、原発事故前の一時期、飯舘村から離れ都心部での生活を送ったのち、村への思慕の念から友人の会社を手伝う形で工場長として飯舘村に戻っていた。その後酒井氏は、ものづくり<sup>⑧</sup>を通じ飯舘村への関わり方を模索しつつも、仕事と村を調和させることで村民同士を繋ぎ、「美しい村」<sup>⑨</sup>への貢献を実感していた。

原発事故後、酒井氏は仮設住宅での生活を続けながら、講演会等を通じ積極的にメッセージを発信し続けていた。現在は、飯舘村の家を処分し福島市の賃貸住宅で生活し、市内で接客業に従事している。

2014年当時、酒井氏は「までい」<sup>(10)</sup>を掲げた行政が、飯舘村民の帰還こそが唯一絶対の村の存続手段だとして、村民の意向とかけ離れた強圧的な復興をすすめていたことが村民の誇りを失わせている要因だと発信していた。

小宮の仮置き場でも9割反対してるんですけど、通っちゃってるんです。形だけの説明会。もうシナリオは決まってる、形だけ。村民に同意を得ようという説明会だけが、ここ何においても続いてるって感じがします。声を出しても、もう決まってることで進めちゃったりとかしているの、何ていうんでしょうか、歯止めがきかないとか。復興計画にしろ何にしろ、すべて「までい」と付けてしまう。本当は、「までい」ではない。私たちは震災後、何が「までい」なのかと考えている。何でもかんでも、「までい」を付けてみればいいっていうものではないよね。帰村しない人たちの政策に対しては、何の具体的な政策がない。じゃあどこが、「までい」なのかっていうところから疑問が生まれてしまって。震災前は良い意味合いだったものが、震災後、行政が余りにも使いすぎたりしてしまって、「までい」という言葉だけでみんな引いてしまうというような状況ですね。帰村する人に対してリフォーム代を負担するとか、そういうのは具体的に出てきてはいましたよね。じゃ、帰村しない人たちはというと、そこはあやふやにしてしまうし。あと、その土地に対しての復興が具体的に決まったりするんですよね。絵空事に私は思うんですけども(中略)。村民一人一人にじゃ聞いているのかっていうと、それはどうなのかなという疑問が出てきたり(2014年5月3日、聞き取り調査)。

現在、酒井氏は飯舘村の自宅を更地にして村を離れた。自身は将来的には飯舘村への帰還に含みを持たせつつも、以前は頻繁に行っていた村の状況をメディア等へ発信することは控えているという。それは、自らの発言を控えることが他の村民へ配慮であると、苦慮した胸中を語

っている。当面は飯館村へ帰還する考えは保留し、村外で新生活をスタートさせることを決意したという酒井氏は、心境を次のように語った。

今の時点で（村の現状を）伝えると、ほかの誰か、当事者が傷付いてしまったりするんじゃないかなっていうことが、たくさん今の現状の中で起きていて、だんだんその伝えることっていうことに対して、自分が臆病になってるっていうところはありますけれど。逆に原発事故直後のほうが結構、批判とかそういうのも含めて原子力のことを結構言えたけど、今になってくるといろんな立場の人がいるので、なんかスムーズに出にくくなってるっていう感じで。だから飯館村出身っていうか飯館村の中でもグラデーションが起きていて、帰った人、帰らない人、まだ仮設にいる人。自分は帰らない人でもう生活が落ち着いてる人のカテゴリーに入るわけじゃないですか。その中で、帰った人に対して批判的なことを書いてしまったら、帰った人が傷付いてしまうんじゃないとか。同じ避難地域、区域にあったとしてもグラデーションはあるし、その圏外っていうか村外の人、避難したくてもできなかった人もいるわけじゃないですか。避難地区にならなかった場所で不満を抱えてる人もいるという中で、書いていくことの怖さっていうのも正直あります（2018年8月15日、聞き取り調査）。

酒井氏の言談にある“グラデーション”とは、原発事故当初、村民は放射線“被害者”として同じ境遇にあったが、8年が経過しようとしている今、村民の現状は避難や帰還、補償をめぐる立ち位置に漸次的変化が生じていることを指している。酒井氏は原発事故直後から“被害者”として、他の村民と同じ“ウチ”の立場で発言してきた。しかし、現在は時間とともにグラデーションが生まれ、変化している“当事者”への配慮と共に、原発被害者としての自分に区切りをつけようとしていた。

酒井氏の語った“グラデーション”は、Bachnik, Jane の inside（ウチ・当該者）と outside（ソト・非当該者）の概念に通じている。ウチとソトの概念は、互いに抵抗しあうものではなく包含されたもので、その境界線は漸次的連続体（グラデーション）をなしているゆえ、形を変えつつ双方の領域は、変容する社会関係の中で互いに統制されるという。すなわち、完全に固着した概念ではなく、文脈依存的に意味付けられる指標といえる。それゆえ、一つの文脈ではソトとされものが、異なる文脈ではウチとされるなど逆の状況ももたらされる（Bachnik 1994: 3-37）。

酒井氏の言談に見出される、離散に伴う窮愁や順応、反発など今日まで先送りにされている村民に総有される命題は、Bachnik の論考に当てはめるならば、帰還を果たす者と同等に本質的といえよう。その上で、さらに酒井氏は、“グラデーション”が生じていると語ったように、自らのポジションをネイティブから支援する側（ソト）に寄せ、“復興”についての考え方を行政の帰還政策とは異なる視点で次のように語っていた。それは、村の存続とそこから生まれる仕事について予期していなかった慮外な所論といえた。

飯館にあった家をそのままにして老朽化しておくわけにもいかないので、いったんリセットという意味で解体を選びました。で、更地にしてみても自分の心はどうなのかと思ったけど、それほど変わらず。まあ戻らない、当分は戻らないでとりあえずその維持、管理

はこれからもしていかなければならないなっていうふうに思いますけど(中略)。最期は自然豊かな所、生まれ故郷でっていうのは、なんか最大の幸福なんじゃないかみたいところは、自分の中ですけど思っではいるんです。なんか若い人とか未来の子どもにだけ縛られると、飯館村の未来っていうのは閉ざされていく一方ではないのかなっていうところですね。高齢者をそこでケアをするという上で、若い人が逆に戻ってくる、自然的に戻ってくるのではないのかなあ。なんか先を見据えるのは、別に若い人が戻ってくれるためにできることっていうところに縛られなくてもいいと思っではいて(2018年8月15日、聞き取り調査)。

酒井氏は避難指示後、長期間伊達市の仮設住宅でストレスのかかる生活を続けてきたが、現在は福島市内の賃貸住宅へ転居し、2018年9月からは就職も決まっているという。暮らしを支える住居と仕事の生活基盤を回復させ、かつ、帰還を「いったんリセット」する心境を「それほど変わらず」と述べた。これは、被害者として厭世的な感情に包まれたものではなく、被害者ではあるものの、支援者の側に回る決断の意思表示と読み取れた。酒井氏は「リセット」した上で、原発事故以前のように、飯館村における仕事の在り様と村民を繋ぐ今後の道筋をイメージしていた。

そもそも放射線被害の不安を払拭できていな中で、帰還政策により村民を被曝下で生活させること自体、その思考が誤りといえる。それでもなお、最期は破壊された故郷に帰還しようとする意識は、人の帰巢本能といえるのかもしれない(倉知 2016: 145)。酒井氏の所論は、責任の所在を放棄した取り返しの利かない難局を黙して受け入れるのではなく、高齢者の生活を支え、そこから生まれる仕事を通じ、村民の自信と誇りを回復する足掛かりとなるのかもしれない。

#### 4. 飯館村における故郷喪失とは

本稿では、原発事故後7年を経て、飯館村青年の記憶の中で語られる村での生活と、それを乗り越えて生まれる感情の変化に着目し、飯館村の現状を述べてきた。今日に至るまで、幾多の危機を移民政策で乗り越えてきた歴史(第2章)と、2014年から2018年の4年間の歳月で、故郷への想望と現実世界に常に揺らぎ続け変容していく胸懐(第3章)を追いかけてきた。時の経過とともに一義的被害者である飯館村民の様態には“グラデーション”が表れ、望郷と現実世界の狭間で胸懐が混淆・重層化しているといえる。

原発事故後、避難指示区域に指定されてから現在まで、飯館村から避難しなかった者、仮設住宅へ避難した者、県外に流出せざるを得なかった者、仕事の関係で通勤可能な区域に居住することになった者、避難指示解除後飯館村へ帰還した者、妻子の健康被害を考慮し帰還できない者、他地域で新生活をスタートさせている者など、村民の生活様態は様々に変化している。

とりわけ飯館村へ帰還した者の内、半数以上が高齢者という実態に加え、次世代の“通勤者”を含めて村が成り立っているといえる。一方で、離散した村民は飯館村に生活空間を残したままのため、属性をもちつつ帰還/移住の決断は各々に委ねられている現状にある。

飯館村では、今後も揺れ動く感情を抱き続ける離散した村民という、故郷への帰還に思いを偲ばせ揺れ続ける意識に存在する、新たな離散民のカテゴリーが出現している。すなわちそれ

は、村への惜別の感傷を深奥に持ち続ける者、あるいは村との結合を求めジレンマを抱える者、感情のどこかで故郷と繋がっている者、繋がろうとする者である。

ここに“飯館村における故郷喪失者”の概念の成因を、帰還／離散の決定に揺れながらも故郷を想望し続ける次世代の飯館村民と措定する。

## 5. 未来への歩み

1956年の飯館村の誕生以来、原発事故による村民の離散も未来の飯館村に繋がる物語の一つの事象であり、その言意からすれば今後50年、飯館村再興の物語は完成を見ないであろう。

殊に、行政的な境界としての“飯館村民”は既に齟齬が生じており、離散した“故郷喪失者”の境界線も常に揺れ動いている。こうした飯館村の事例は、将来的に日本で起こり得る、離散民の新たな特徴と位置付けることができる。

本稿では、現状打開の妙策を体現するには至らず、依然課題として残されたままである。だがここで考察した事例は、飯館村民の帰還を最も重要なテーマとし、かつ、離散民の故郷との柔軟な連帯に寄与するものと考え、故郷との連環について考えるための一つの視点を提示するものになるだろう。

### 付記

本稿は、立教大学学術推進特別重点資金（SFR）大学院学生研究の助成の成果の一部である。この場をお借りして御礼申し上げたい。

### 註

- (1) 2018年3月1日現在の人数。飯館村, 2018, 「県内外の避難者数および村内居住者数」, 飯館村ホームページ, (2018年8月10取得, <http://www.vill.iitate.fukushima.jp/uploaded/attachment/5744.pdf>).
- (2) 東京新聞編集委員の山川剛史(2018)によると、避難指示解除後の村内居住者618人の内、高齢者は375人で、高齢化率は60.7%となり原発事故前の2倍となっているという。なお、飯館村行政は居住者の年齢による内訳を発表していない。
- (3) 2015年修士論文より。原発事故以来、飯館村民の生活基盤は破壊され、原発事故前のコミュニティや公共圏という考え方は完全に崩壊した。行政のように住民の帰還を前提としているうえでは復興は停滞したままで、その上、村民のアイデンティティの継承は帰還政策による行政組織の維持という体式に転換され、強権的な復興政策に離散した村民も将来的な帰還に向けての希望を持たずにいる。さらに、村民は重層的な不安要素を内包しており、終着点の見えない窮状に陥ったままといえる。
- (4) 冷害による農業のリスク対策として、気候の影響を受けず収入が見込める畜産を加えた結果、飯館牛の名称が認知されつつあった。1953年の冷害後、酪農が導入され1960年より雑牛から血統書つきの北海道の牛を購入し、本格的に酪農が開始された(飯館村史 1979: 594 - 635)。
- (5) 総務省, 2018, 「市町村数の変遷と明治・昭和の大合併の特徴」, 総務省ホームページ, (2018年8月10取得, <http://www.soumu.go.jp/gapei/gapei2.html>).
- (6) 地域的发展を目標とし、10年スパンの将来構想を示した基本理念といえる行政区計画。
- (7) 戸主(家長)が親族を統制する、明治期の民法における家族制度。
- (8) 村民がデザイン・作成した農作業用のエプロンや前掛などを、道の駅で販売していた。村民の労働観

として、忙しさだけにとらわれない仕事のあり方を模索した暮らしがあった。

- (9) NPO 法人『『日本で最も美しい村』連合』ホームページを参照。  
(<http://utsukushii-mura.jp/iitate/>、最終閲覧 2018 年 12 月 18 日)
- (10) 飯舘村の方言である「までい」は、本来、「丁寧」「手厚く」という心を込めた言葉として使用されているが、4 次総（第 4 次総合振興計画）で採用されて以降、行政における飯舘村のイメージ戦略として定着した。「までい」という方言が復興のメタファーとして使用されていることに嫌悪感を示す村民も多い。

#### 参考文献

- Bachnik, Jane M., 1994, "Introduction: Uchi/Soto: Challenging Our Conceptualizations of Self, Social Order, and Language," in Jane M. Bachnik and Charles J. Quinn Jr. eds., *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*, Princeton: Princeton University Press, 3-37.
- 飯舘村, n.d, 『広報いいいたて縮刷版第 2 巻』.
- 飯舘村史編纂委員会, 1979, 『飯舘村史・第一巻 通史』飯舘村.
- Kondo, Dorinne K., 1990, *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses in a Japanese Work-place*, Chicago: University of Chicago Press.
- 倉地克直, 2016, 『江戸の災害史』中公新書.
- 桑山敬己, 2008, 『ネイティブの人類学と民俗学——知の世界システムと日本』弘文堂.
- 成田龍一, 2000, 「都市空間と『故郷』」成田龍一・藤井淑禎・安井真奈美・内田隆三・岩田重則『故郷の喪失と再生』青弓社, 11 - 36.
- 大久保貴弘, 2015, 「“ドメスティック・ディアスポラ”の視座から考察したフクシマの現在と未来——旧谷中村離散から飯舘村全村避難へ」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 2014 年度修士論文.
- 佐藤彰彦, 2012, 「全村避難を余儀なくされた村に〈生きる〉時間と風景の盛衰」赤坂憲雄・小熊英二編『辺境からはじまる——東京／東北論』明石書店, 44 - 88.
- 佐藤昌明, 2018, 『飯舘を掘る——天明の飢饉と福島原発』現代書館.
- 渡辺尚志, 2013, 『日本人は災害からどう復興したか』社団法人 農山漁村文化協会.
- 山川剛史, 2018, 「8 年目の福島原発事故」第 4 回原発と人権全国研究・市民交流集会原稿.